

恩師和田繁二郎先生

芦谷信和

先生に親炙することになったきっかけは、京都工業専門学校（現京都工芸繊維大学の旧制）を卒業して、立命館大学二部文学部日本文学専攻の三回生に編入学した一九五二年の秋、クラスの親睦会（コンパというような言葉はまだなかった）の時であった。まだ戦後日が浅く、すき焼きなども貧しい学生には日常的に食する状況にはなかった時代である。幾つかの卓に分かれて五六人ずつ席に着いたが、私が座った卓は、当日唯お一人時間を割いて御出席下さった和田先生の真向かいであった。元来、先生方の前ではひどく緊張する私が、どうしてそんな席に着いたかは疑問である。その時、炊き方に自信のない学生のために、先生が手ずから大変おいしく炊いて下さったのである。肉や種々の具を平面分割したようにして炊く関西式すき焼きに慣れた学生たちにとって、砂糖と醤油で味付けして炊いた肉を下に敷き詰めて、その上に葱やその他の具を乗せて炊く、関東式の目新しい炊き方であった。学生たちと談笑していらつしやる先生の爽やかな魅力に、私はこの先生の指導を受けたいと思った。先生は四十歳であられた。

当時は卒業論文指導というような講義や演習は特設されておらず、各自が機会を見つけて、先生方に質問して教えを受けたり、

友人から種々な情報を得て、論文を作成するのが普通であった。同級生の中では、今も祇園で古美術店を営んでいる河村欣信君が、最も情報通であった。彼によると、やはり先生方のどなたかに十分指導を受けないと、良い論文は書けないということで、ある日一緒に和田先生をお訪ねして御指導を受けようと、誘ってくれた。万事お任せして、日曜日の午後にはアポイントメントを戴き、御自宅にお伺いした。一九五三年の春、今から四十六年も前のことである。機械科からの編入生である私は、随分と幼稚な質問をして、初歩から御指導を受け、また当時白川静先生や岡本彦一先生と一緒に出しておられた『説林』に発表されていた論文などを読んで、その書き方をそれとなく学んだりして、どうにか卒業論文を書き上げることができた。その一部を当時発行された『論究日本文学』に書き直すように、先生から御指示があったのは、その後の私の研究生生活にとつての最大の幸運であった。

爾来およそ小半世紀にも渡つて、御指導を受け、また親近させていただくことになった。

当時私は島津製作所紫野工場に勤務していて、職場から先生のお宅まで五分ほどの距離にあつたので、屢々先生の貴重な時間を

空費おさせし、奥様にも大変お世話になったのであるが、私にとつては大変幸運なことであった。

その頃の学友であった田口正直さんや中山幸子さんとお訪ねしたり、御家族の皆様を『方丈記』の庵のあった日野や瑠璃深へお誘いして、キャンプを楽しんだり、池で泳いだり、若さの至りから随分傍若無人な御無理をお願いして、奥様にも御迷惑をお掛けしたのであった。しかし先生はいつも快く付き合って下さったので、つい三人とも甘えていたのであろう。日野では迎りの石を組んで竈を作って下さったり、何事もみごとにこなされるのに舌を巻かずにはいられなかつた。写真にも特技をお持ちで、よく写していただいたものである。

創元社から『芥川龍之介』を御出版になった時には、三人で御講義『現代文学』のテーマであった『或阿呆の一生』に因んで、ゴムの木をお贈りしたが、先生は新しい芽が出たところをはがきに水彩画でお描きになって、いただいたものを今も大切に保存している。絵にも卓抜した技量をお持ちになっていたことが伺えるものである。

当時は今のようにゼロックスもなく、資料の蒐集には文献を筆写しなければならなかつた。私は先生の研究室に一週間ごとにお伺いしては、『文芸倶楽部』『新小説』『文章世界』などの明治期の雑誌を一冊ずつ次々と借り、ノートに筆写させていただいた。

先生の御紹介で花園大学に勤務することになったが、立命館の非常勤講師を兼務していた時には、時間割が午前から午後に渡る

と、先生の研究室で萩焼きの茶碗で煎茶を入れていただいて、持参の弁当を食べるといふ何年かがあった。

殆ど誰にも仰られなかつたが、先生は文学以外にも絵画・陶芸などの芸術全般にわたって深い御造詣をもっておられた。

広津柳浪研究会は一九八三年夏から八八年まで先生を中心に斧文山房(和田邸)の座敷で大体月に一回催され、『広津柳浪研究』を第三号まで出した。各人がそれぞれの研究テーマを別に持っていて、また注文原稿が入ったりして、なかなか論文が集まりにくくなって解散ということもなしに以下の号が出せなかつた。一つの心残りである。

私の院生時代に出版され、今では芥川研究の古典になって、いろいろな論文によく引用される『芥川龍之介』以後の全著を頂戴しているが、研究者であるとともに、歌人としても著名な先生は、大変鋭敏な感覚をもっておられ、それがまた研究面にも顕著に現れていたように思う。御生前多くの著書論文に啓発を受け、実証的な本格的な研究方法をお教えたいたのであるが、不肖にしてその御厚恩にお報いするだけの成果の挙がらない現状であることは、慚愧の至りである。恩師和田先生を追悼追懐することは、私の研究生活の歴史を回想することに重なる。

先生がなくなられて、振り返ってみると、私などはいかに絶大な御恩を受けたかが今更ながら思われるのである。御冥福をお祈りすること切なるものがある。

(あしや・のおかず 元立命館大学教授、現花園大学教授)